面影莊子

一

特
ヘ13
332
1

門イ5 曾
332
巻 1

へ13
332
1-4

へ13
332
巻 1

明治三十六年十月十三日
坪内博士
兵事贈

面影莊子叙

宮あり車爾として余に謂ふ四方の食忘れざるや鹽に酒に醋の相反あり果然として禁忌制と牝牡とそれ絶対乃要を釀す美羹に紂桀を調味し貪吏に美奇

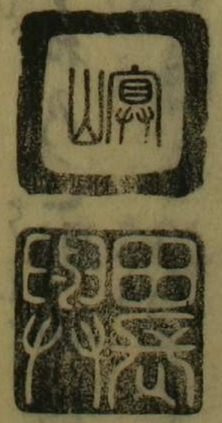
を燒梅とろん性命道德乃食忘
ちら真ゑゞ此篇に於ゝ亦意
つ仁義乃教と清虛の教と紙
別瞎に浪に孔孟莊列乃異味
を和饗とす將喫樅漢に食意
狩柞後世乃易牙を侯狩人余
が四宮ちゝや孔子の棄雪孟

子乃書清こゝも仁義乃一廚冊に
を莊列清虛の風味を搦こ
莊列虛無乃膳部あゝ仁義の
淡味を味ひちゝ故に甘を愛
して苦を惡ゑ紙好んで鹹
を厭ふりのゝ味紙知るりの
に非に八珍れゝ野藪海錯乃

味あり大宰帥とらんぐ窮肋豈
捨べりんや客唯こゝろて退くてれ
を序とし

寛保三癸亥正月之吉

摂江　冥山田長與識



面影莊子卷之一目錄

一　蟻鯨情量
一　粉蝶辨色
一　萊蕪苦樂
一　地黃精靈

西影莊子卷之一目錄

東京大保久保町一番地 坪内逍遥

西影莊子卷之一

○蟻鮞情量　寘山田長與述

西海の鮞東海に於び紀りある測海に
よりて例を乃まび数多の蟻ども東西
に馳らぶ大王の淨幸せしのり紀り彼
鮞蟻どもに謂て云海らい造化のうとて
をゆるる小虫の分とてる細らく者

忠乃義を正しく大王呼うり片脇いてしりぞ
ぐ方すの穴にまり居てあをきてば就ご
くちさうる物あるまをもつぐろう笑へば
蟻乃大将ちこ生ゆ海ぐ麁の大さちう
にかうりて独くぐ小さをを笑ハ海ぐ情量
乃乃ぐ有に独てうせそもめへ海より大き
すう物をえてい大しうべ坂り大ム大海
をくぐいうと信ぐべ海ぐ奥仲間に鯤

しう奥あう海ちハ大きやというぐ信ぐまし
こも海ぐ情量の乃ぐ有にあうぐるめへ海より
小さうものハ小ちうとうべうそもめへ蟻と
くぐ信ぐべ世の睫に蟭螟とうう虫うう山
虫乃住国に無量の都あう鄙あう彩をあう
村邑もあうて云れ数の虫ども住居とうう
をうぐ海ハ虚偽と思ひ中く信ずまず
これ海ぐ情量乃ぐ有に非ざるめへちう海

ゞ軀ちさくとらんぐも十丈にいるこれば強くいい
ふつて微細り出ちもも先用もあるにもあり
海ゞ用も強くゞ用もこれるあに遠いい大きい
にに金人まを海い鰯鰕ゞこの新に腹を
海くつせば強くも干ゞくゞる蟻り新に舌鼓
して性命を蓄人取に矣ちし且これ用あ
るりのい物に明ゞるせ沈に明ゞるゆ血夜
日月あり足ゞるりのい地あり沈に地あるこれ

こ丘海川ゞくんいるこゞこれ海に鯢あるて吏
海りかくしひあもこれ強くにも北蟻あるゆ吏
海の道あり吏帰り道あるていくるこ身あ
ゞ吏ふるこ身あるて貴賤上下の別あるち縁
上下の別あるゆ人ち花は徳義あり海くゞ軀の
ちちるを自慢ちれゞ海ゞ仲間の鯢い海
よりい大きゆ鳥仲間の大鵬い九万里に翅を
のゞこもてより海をるゆ九年ゞ一毛にも

及びどくこまつの物を微塵乃虫ともろ物
わり日をもつてたの眼ともに月をもつて右乃
眼ともに世界の茅未を髪髪ともに四海の水を
瀦滯血ともに一ともびの息ともれば風ともうるの
命を貫精方後翁ともに此人ともうまもに人
間ハ多論鳥獣ともに聖人賢人佛菩薩仙人も
人おもしくくこ百六十乃節くに族る有の虫
ともう此方後翁ハ清く堂ともにてらわどり

大さうまもどもに邪に陥りうもともせば人間ハ
其中に在て小うれともも咲どもせば虫ハ又其
内に居まもども逼狭ともせず天地ハ成住壞
空をもつて一劫ともに虫ハ生老病死をもつて
一劫ともすれば法ゞ紙を微細乃虫ともに
嘲ろハ頭乃虫ハ耳乃虫を笑狭ともに片
田舎の者ともに知ぬもどもに是紙者の糸乃
人ともまをもつざろものも況や人乃糸の度

大無遠の天地をや決せんと自分の情量の粉々たるけをもつて世間の大小をさだめんまゝ中〳〵そひもよらぬ事也常に云恒に世の不をもつて是ざの是をもつて是ざの是を論ぜんまゝ拘儒小士の推量臆度にて及てこれを人を絡の悪ぞ聖人を道に足ん一己の情量決して天地を窮むべりんや決してこれをもつぶ弧〳〵ふするとゝあるとゝに決ゞ大

きまりにもかゝるに一切元せ相よ相て彼此の見を断して後弧らよりを理今すべ一世ろに虚ともの道に彼此の二見を止てかのもの一己み情量をもつて大小を論じあゝそんどんからも正月の心地ちゝんこもそなゞ逍遥指の意味すべ

○粉蝶辯色

槐の木の虫どもよりあつまりて居るを
粉蝶のごとく飛来る槐の虫ども集云
洗い行間のものを純白なるに白粉して其
体をこそ蔡紙のごとく翼を敷さ出し
げうの飛やうにもあらぬものを粉蝶ぞ云
紙ハ蔡ら蔡に見へ蝶とりの也洗らハ
槐の木にのゝ住るもて其ホを去ゝ紙れ
と悔を思へバ又洗らハ紙祇を懐き集ゝ洗ら

ぞ議乃青き紙白もて弟の巧に非ずりく
より造物者のつくるもとゞ其間に拙て行ぶ
是非とゞ〻んやそもゝ物の事い是非より生
ず仁義を祖述し孝弟薬紂乃善悪を
別ち孔孟を規矩とし王道をとゝとゝび
力をもつて仁義を假覇道を悪むい儒者の
是非ちり孟氏悪を智恵を退事聖を
棄て思を後とゝろの道家乃是非也知滅に

ゐもむさ狩見弟を辞して一切所有を捨
戒律を持て貪瞋癡の三毒を存ずる佛
氏の是非たり儒者佛氏をもつて異
端と詆て佛者儒教を指て三世に時処
世間法義に先自出世間の法こそ道
家い虚元一玄の道を徳して聖賢を抑へ
名教のもとが道を是として人の道と邪と
これによつて是非のうそひを起し海内

硯とし万本を筆として世界を紙として書
すとも其事論難なるべし諸〻の道とも
事とともども物は事するべうず用ハ物と足
らず役ちもども訓狐とらへ立夜い徹義人の
法をもこれども益い大ふをも足れ日本絶つず
用も果して事するべうや耳い聞を用ら役ず
もども波羅陀羅王耳をして仏虫い聖
にて生手い角にてもく耳果して事するべうん

やはり物いふまぐ役うまども海水に藻の物
いふ國あり馬の物語り鼻をうつてに采して
音するべりんや宝い地に附ける歩行ばかりこそい
瀬くこと宝乃役ちれども蠟い御に行蠅を
天井に仰ぎ捷宝と采して音するべけんや
却も鏡にも備久い竹みもう師の蓋に扇ぐ
風ふと備却采して音するべりんやくのごく
物毋のく音ちうまうけまばこまいにうて

仍ぞ足非乃手をとうとべりんや洗らげ紙を宛
ふまこまにはど洗げ藻のまを色うをつくと
思ひ紙藻乃白をと矣やうう物とろにより
て紙を非う自是とすこまば変の若くし
ふをうつて蟹の虬結をとうれやされば
のまげもじふとうて人の結を張ちう大
瓶乃中の空をうつう蚤の中は空を宛ふ
や矣をうつて矣を拆い百衣の弓数にて

燕石の仮託攻撃せ智恵をもつて愚癡を
発するの特関人放をもつて土偶の心識する
をかたーむせ爰の狂にて紙と称ず人あり紙
しるす物あり爰を見て後称ずべし人をく
あるひーあるひーあるいたく何物をもつ言ーー何物を
ろ幻とせん故に聖人の紙を非ととるあれ
ども其非を実に紙を是ととるのあれ
ども其是を入ず万物いたーー平均齊をも

たり五ーよく齊うもるにあるーす齊うもべき
事あるべ物を齊うもるに非ずこを荘子
ぶ齊物論の言味せとしい絶言の意去
○茅茨
茅根生茅に倩て云世と紙と同一新に
て紙に何用にても同ド曾は生ちら後に言杠
の加青たり紙れ是まで生の分の上れ先

茎を絞りて生汁にして伽羅を入れ
何を苦ともなく世を過ぐす某がふるまひせ
れて同もなく二番目より指葉と称ぜれ
其後は葉付生姿ともてなす肥臭き身
をもつて椎茸鱧の揚身うんぐ前をなべ
あるじは胡方味噌に和して風呂吹とする
又は香の物とも茎ともに辛味にて皺ぐけ
にするもどき干生姿と黄坂に和して

某が養にて一生をふむ所以なり去ぐる生れ
付長短く横肥て畠物仲間にて傾城とゆび
ひもを不仁なるのり邪に入る一生涯の苦なり
又世が苦にはいろん大根が云某甲が苦も世ふ
と為ず別して鰹とうつて膳邪界一乃大役と
勤むるも世が及ばぬ紙界の大業たる事
なりて干大根とたりてハ夏の物にて海で
蘆葦高とくる志物と出あるて海うぬふ

ども稟受胴体長くて色白にして生まれつき
自物仲間にて伴なる人戒の化物又い樋樋の多
化とさせるる事一生の若ちう迷い勢れ短
まりを悔ひ秋い如実ちうを歌せいでも造物
うえ人乃許へ行き迷と紙とよい加減に造易
てもらへべしとなり二人ちがい伴い行くを例
に胡蒜塩ちうて行ちうーが大きに笑ひて
云嗚呼迷ちい忍乃ちうしさ物ちうそも物の

新しいうぶい物の情ちう万物とくくと天
に出人事の成に否よ非ず自然にして成れ
ものや業根ぐ長く芋青ぐ短さも自然乃
性みて今文換益とべき物に非ず芋青い
茎乃物語りて短小乃名ちう業根い芋さ
をもって大根と称ずえれば迷ちい其戒と
名と正書に得ぐ今又造物を人に法て
戒を作り易てもらで大根芋青乃名も戒

を失ふ物とてもいうすつてさで大根の
もく　さを重寶し　性質肥えたる紙色
ばかりを洗らず自然の德用を及て不德とな
つて烏の目に深ざれば色黑ぐ見るゆゑ
せざれども色白しうれ糸ばかり自然の性也
洗ら紙を又よ出かつぶ田うず中庸の紙を
得ずとて又とも色微赤にせうら商物仕間
にて高陽あるひは醪酒拔書上ちんど鏡

られ又は塗樽の吸捏とて又にあひ年ぶりを
洗紙まよりも下ざるまぶ一滴の酒をも脱るる
まいうけもどきいろも色の赤へ自然の性
きれば是非ありを紙の白粉へ彼ぶ化粧と
るに非ず茄子ぶ鉄漿も彼ぶ伊達にあらぶ
色赤自然の性也洗らぶ紙も紙も固より
天道より造して横事絲上ありもぶ絲の
身の赤上を安んじて天道をふむべし天

乃命令を奉じ待ちして万事を整理し
に終て一朝にして其利用を得ることあるにい
ゆえれども永久を保つ事ハ人力強敵不
義ハ天命の財寶を盜り私を巧に
して虛偽の實へ人を陷溺の輩に曉し
ことしい止

○地黃精靈

梅亭乃主人雞生の為に地黃丸を服用す
ること久しくして主人病を出す
云ふ紙に書乃事に服用し給へ地黃丸乃精
ちり実乃紙を見し服して雞生と思ひ給へ
し事ぞ雞生の真實義を志り給ふ迄
其奥旨を表ハさんとあに孔子来りて
て竹箆を斜にうゆ一調子あげてさそ迄天
地乃万物一物も生ず紙養ふ物も亦一刻も

生を御ざの右もちし貴族の人に経日の
分の分芳を書花版又に酒の糠に耳ひて其
生仏書らい富貴の人に寄葉の臘室にあり
て分を書らい美女花蝶に常侍させて男仏
書らい琴之弦八ノ流契に耳を書らい八珠醍
醐の美酒醞ぐ〳〵けるに書らい流奔しる
性を書よ志れたる者を書よ
りの仁仏て反て内仏ここるものせみを用

て内ノ神氣を薄ふこと書生の大道なり
内の神氣仏薄ふにい虚之怙法とふ妙業
にあるとんび能ふず其妙業ノ配剛い視ふ事
を收事用を御ル用の色に奔ふあを防也
聴ふを却て耳仏御る耳ノ嚢誼を納ふ事
と防ちふ法之法の物を食しにを御るにノ
美味仏美ふふ仏防也器かくのごとくみと
防ぎ仏性を寂滅不動ノ地位に居しめ内

乃神氣紙葉之志ゑるに目を書んとして色と
もつてしるを書りんとして旨味をもつてとるい
生を書りんとして反て性を傷れりのやそれ生い
吾得て書んとするものに形ず天乃万物を生
じ乃此生あれば乃の書ひあり蓋地児乃妄加
ちるも気を捜て求むるまを知ることを意
ゑも生を書んとすれ知るやしてて魔が目を
困風と又てい帰ることを意ゑを生紙御ゑ

を知る也又之情乃苦楽も無象を得て
生紙書ひ無い水に書ひ多い林に書ん志
ゑれば生の道い生と偽に来るものやゑるの
ものを待ばして知るものや故り聖人い天に
任て知ひ身を徒て命を候生の自然
に志てゑるて造化の者と性乃定故り生
を益又生紙傷るのまをる古昔のよく
生と書んりの之家あり儒に命を之教

とゝひ佛法に之生とゝひ道家に其身を和
して身存ととゝひ命をうゝとゝひのゝ
天の正命を明かして天道に任すゆゑ
長生をも死ずゝ天折をも悲まず之生とゝひ
ものゝ生ひのりよく生ぜざるを知ざるゝ
がゆゑに生ざるをもつて生ぜざるにも非ざる
ちり其身を和にして身存ととゝひ其身を
内にして亦其身を忘れやむゝ腫物と物

ふりのあり痛ひとく命も弱き形骸をの
ちゝ文を方にて記しゝと告まる彼者敬て
周章年 腫物の痛も寿命を彼れに委ね
約道ぞゝ文のまをのゝ思ひ解合るけ
ゝの腫物のもと人命をうゝれ其身をの
にして身を存ずるの明効なり其ゝ論ぜる
不ゝ其ゝ生を乃ち味なり豈地獄
丸の効能に勝ぜんとして形骸衰乃方

大根うり通りしゲたを命のたをゆめとらしく、
地蔵丸の精い消うせたり